

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	山崎 世理愛
論文題目	エジプト中王国時代における葬送儀礼の実践と展開—棺の装飾と考古資料からみた器物奉獻儀礼—

### 審査要旨

本論文は、古代エジプト中王国時代の葬送儀礼について、その中核を成す供物儀礼の実態解明を目的としたものである。従来の供物儀礼の研究は、食糧供物が中心であり、文字や図像資料および考古資料を用いて具体像を明らかにするものであった。さらに、食糧以外の器物奉獻儀礼に関しては、奉獻すべきモノの構成を大枠でしか捉えられていないほか、実践に関しても具体的な方法は不明であった。そうした研究状況の中で、本研究は、多数の未刊行資料を含む当該時期の木棺の装飾および実際の出土遺物の両方を分析し、共通点だけでなく、両者の相違点も排除することなく考察している。その結果、古代エジプト中王国時代における器物奉獻儀礼は、器物の組み合わせや配列により当時の思想を具体化するという戦略的な実践がされていたこと、理想とは異なる方法を用いて、実際にはより良い儀礼空間を形成しようとする創意工夫があったことなどが明らかにされた。

本論文は、第Ⅰ部 中王国時代の歴史的背景と埋葬習慣、第Ⅱ部 オブジェクト・フリーズにみる器物奉獻儀礼、第Ⅲ部 考古資料にみる器物奉獻儀礼の3部構成になっており、さらに巻末には、本論文で分析対象にしたオブジェクト・フリーズに描かれた1,973点のアイテムに関して、遺跡・棺ごとにまとめられている。

第Ⅰ部第1章では、古代エジプト中王国時代の社会の概要として、「エジプト再統一から中心地の移動」、「中央集権化の過程」、「中王国時代の終焉」から論じている。古王国の崩壊後、第一中間期においてエジプトは、北のヘラクレオポリスの勢力(第9・10王朝)と南のテーベの勢力(第11王朝)に二分され、対立抗争の結果、第11王朝メンチュヘテプ2世により、ヘラクレオポリス勢力は打倒され、国土は再統一された。エジプトは再統一されたが、中央集権化は進まず、中部エジプトなどでは再統一後も世襲により州侯という存在が残されていたこと、また、第11王朝のもとで再統一前から州侯が存在しなかった南部においては、再統一後に新たに州侯の称号をもつ人物が出現したことをあげ、メンチュヘテプ2世の再統一後も当初は緩やかな統治体制であったと論じている。また、第12王朝初代のアメンエムハト1世が、彼の治世の初期にテーベから王都を北のイチタウイ(リシェと近郊)に遷都したと従来されてきたが、本研究においては、この遷都をアメンエムハト1世の治世の後半に置いている。

第12王朝後半の社会における芸術や物質文化に見られる変化とともに、国土の中央集権化が進んでいったとしている。具体的には第12王朝センウセレト3世治世の後半と次のアメンエムハト3世治世の前半に、州侯による地方の統治体制が解体され、王宮に従属する官僚が国家行政も担う支配体制が発展していった。中王国時代の終焉に関しては、諸説があるなかで本論では第13王朝までを中王国とする説を採用している。

第Ⅰ部第2章は、埋葬習慣と葬送観念として、「中王国時代の副葬品研究」、「文字資料にみる来世思想」に関して論じている。副葬品の研究では、中王国時代に利用された副葬品にみられる変化の大枠と従来の副葬品研究の方向性について概観している。中王国時代における埋葬習慣の最大の画期は、第12王朝センウセレト3世治世頃であり、中王国時代前期に船や穀物倉庫、食糧生産や工房などの場面を表現した木製模型が頻りに副葬されていたが、中王国時代後半になると、こうした木製模型は姿を消して、王族を中心とする高位の人物の埋葬においては、本論文の主要な対象遺物である杖類や武器といった王権を象徴する特定の器物が副葬されるようになる。このような副葬品が納められる埋葬が、「宮廷タイプ」とされ、被葬者のオシリス神化を重視した埋葬と位置付けている。中王国時代前期と後期では、木棺に施された装飾にも大きな変化がみられる。本研究の主要対象資料となる「オブジェクト・フリーズ」は中王国時代前期の木棺に主に描かれるものであり、中王国時代後期にはほとんど見られなくなる。このような埋葬習慣の変化の背景には、国家の中央集権化という政治的側面と被葬者のオシリス神化という宗教的側面の強化が大いに関係していたとする。また、特定の器物に着目し、その機能や意味合いを検討することが必要であるとしている。

第Ⅱ部以降からは、具体的な分析に入り、オブジェクト・フリーズを対象に分析と考察を実施した。第1章では、オブジェクト・フリーズに対して行われてきた①巨視的アプローチ:全体的な配置の分析、②微視的アプローチ:各器物の個別分析という2つの研究法についてまとめ、本論文で実施する両者を折衷した新たな研究の必要性を挙げている。第2章では、本論文で集成した83点の木棺資料について遺跡事に概観している。出土した遺跡は、アブシール遺跡、アビュドス遺跡、デイル・エル＝バルシャ遺跡、ベニ・ハサン遺跡、ハラガ遺跡、リシェト遺跡、メール遺跡、リッカ遺跡、アシュート遺跡、セドメント遺跡、サッカラ遺跡、テーベ遺跡の全12遺跡にのぼる。第3章では、オブジェクト・フリーズに表された器物について、描写コンテキストを重視しながら種類ごとに検討することで、各対象器物の新たな特徴や棺タイプによる描写の傾向の違いを抽出している。第4章では、それまでの分析を踏まえて、タイプ1とタイプ2、それぞれの棺上における器物奉獻儀礼の典礼と「実践」方法を復元した。また、タイプ2について描写側面の傾向をもとに思想的背景の考察を行った結果、中王国時代における器物奉獻儀礼の典礼はピラミッド・テキストの伝統を一部維持しながらも、新たな発展を遂げ、さらに棺上で反復性を有して描かれ、通夜の再現が試みられていた。

第Ⅲ部では、実際に墓から出土した対象器物を使用して器物奉獻儀礼の実態を解明するという目的のもとで分析を実施している。本研究では、オブジェクト・フリーズおよび実際の出土遺物の両方を用いて分析し、相違点を排除することなく考察することで、当該期における器物奉獻儀礼の実態解明を試みた有意義な研究と位置付けられる。オブジェクト・フリーズに頻繁に描かれた「王族の器物奉獻儀礼」に属する器物は、一部を除いて実際の墓から確認されている。それらを伴う埋葬は、「宮廷タイプ」と呼ばれ、他の埋葬と区別されてきた。「宮廷タイプ」という語は、1916年に刊行されたリシェト遺跡から未盗掘で発見されたセネブティシという女性の墓の報告書で初めて使用されたもので、彼女の埋葬がダハシュール遺跡で発見されていた王女や王のものと同様であったことから命名されたものであった。本研究では、「王族の器物奉納儀礼」に属する以下の器物のいずれかが出土している墓を対象とした。その器物とは、①短剣 ②短剣の鞘 ③弓 ④矢 ⑤メドゥ杖類 ⑥アメス杖 ⑦メケス杖 ⑧湾曲杖 ⑨ウアス杖 ⑩ジャム杖 ⑪二又杖 ⑫ペジュアハ ⑬棍棒 ⑭殻竿 ⑮下エジプト王様式の衣装:ビーズエプロン、ツバメ形護符、動物の尾 の15種類である。

本研究では、中王国時代における器物奉獻儀礼の実態を踏まえ、その展開に着目して当時の政治的・社会的背景との関連性について検討している。本研究は、中王国時代における器物奉獻儀礼の展開は、当時の社会状況と連動していたことが判明している。中王国時代後期になり中央集権化に伴い葬送文化にもその変化が見られ、特定の副葬品の利用に対して格差を与えることで、ある程度の自由を認めながらも確固とした中央集権を確立・維持しようとする様子が明らかにされた結論付けている。

審査会において、中王国前期における箱型棺内部の装飾の見せ方(展開図など)や巻末資料としてあげたオブジェクト・フリーズに描かれた1,973点のアイテムの表の形式など、今一つの工夫の余地があるのではなどの指摘を受けたが、多数の未刊行資料を含む棺の装飾および、実際の出土遺物の両方を詳細に分析・検討した本研究は、これまでになかった古代エジプト中王国時代の葬送儀礼の研究に、新たな一頁を加えるものと高く評価できるものである。以上のことから、博士学位の授与にふさわしい論文であると判断した。

公開審査会開催日	2021年 1月 29日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	近藤 二郎	エジプト学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	寺崎 秀一郎	マヤ考古学	
審査委員	金沢大学新学術創成研究機構・教授	河合 望	エジプト学	博士(ジョンズ・ホプキンス大学)
審査委員	國學院大學文学部・兼任講師	和田 浩一郎	エジプト学	博士(國學院大學)